学校内への特別支援学級理解の広がり

～「出前授業」の定着から「逆出前授業」への発展 ～

相模原市立東林小学校　**松本　翼**

Ⅰ　はじめに

私は平成２０年度に現在勤務している東林小学校に新採用教諭として着任した。最初の三年間は通常の学級の担任として過ごし、４・５年目の２年間、松の子・みどり級（本校の特別支援学級名、以下「松み級」と記述する）の担任を務めた。初めてのことで分からないことばかりであったが、本校職員や専門機関の方からアドバイスを受けながら多くのことを学ばせていただいた。今年度、再び通常の学級担任として６年生を受け持っている。

本校では、特別支援学級や障害理解を深めるための取り組みとして「出前授業」が行われている。詳細については後述するが、平成１９年度、当時の松み級担任が立ち上げ、職員の入れ替わりはあるものの現在まで七年間継続されている。また、私が松み級担任を務めていた昨年度、新たに「逆出前授業」の取り組みを始めた。「出前授業」が主に児童の理解を深める取り組みなのに対し、「逆出前授業」は職員の理解を深めるための取り組みである。私は通常の学級担任だった３年間も松み級のことに関心を向けていたつもりであったが、実際に松み級担任になってみると、そこで初めて知ることがたくさんあった。学校内へ特別支援学級理解を広げていくためには、児童だけでなく、職員・保護者を含めた学校に関わる全ての人に伝えていくことがより効果的なのではないかと考えた。

そこで、この二つの取り組みを中心にこれまでの実践を振り返るとともに、今後の在り方について述べたい。

Ⅱ　「出前授業」の定着

１．導入の経緯

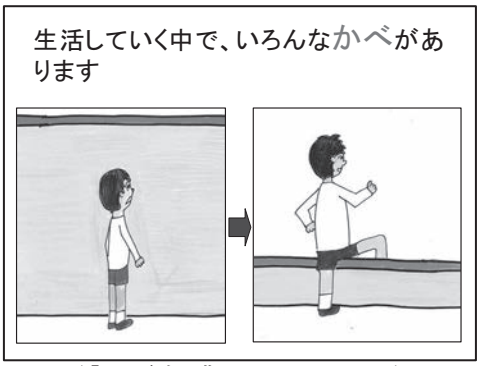
「出前授業」の導入以前にも通常の学級児童と特別支援学級児童の交流の場は設定されていて、３年生各クラスと松み級とのランチルームでの給食交流が行われていた。初めて話す友だちに恥ずかしがりながらも和やかに食事をしていたが、交流後３年生の児童に松み級のことについて聞いてみると「病気がある」「みんなと一緒に勉強できない」「障害がある」と答えた児童がいたものの、ほとんどの児童が「知らない」「よく分からない」という答えだったそうである。それまでに松み級（特別支援学級）について何か聞いたり説明を受けたりする機会がなかったのだ。

「本校の子どもたちには素直さ・優しさが感じられる。きちんと説明すればしっかり理解することができるのではないか。小学生段階からきちんと説明し理解を深めることで、将来的に共に同じ地域で生活するものとして、相手の立場を考え行動できることにつながっていくのではないだろうか」（本校上野隆教諭の平成２０年度教育実践研究論文より引用）と考え、「出前授業」の取り組みが始まった。

２．内容と進め方

「出前授業」は松み級担任が通常の学級に出向いて「道徳の時間」の１時間扱いとして授業を行っている。導入初年度は四つの学年のみだったが、２年目からは１～６年生全ての学年で行っている。

パワーポイントのスライドで松み級の授業や児童の活動の様子を紹介したり、通常の学級のみんなにできること、してほしいことについてイラストを元に考えたりできるようになっている。



〈「出前授業」のスライド〉

「出前授業」のなかでは、それぞれの児童の課題について「かべ」という言葉で表現している。乗り越えるのが難しいような大きなかべを、学校での学習や生活を通してかべを低くし越えていくということである。松み級の児童にはコミュニケーションのかべ、気持ちのコントロールのかべ、学習や運動のかべなどがあり、自分のかべを少しずつでも乗り越えられるように、今のその子にあった必要な学習をしていると伝えている。

１年生から６年生まで学年に合わせた内容を設定しているが、この「かべ」のイラストはどの学年にも含まれていて、前年度のことを忘れてしまっていた児童からもこのイラストを見て「あぁ思い出した！」という声があがることもある。

「出前授業」を実施するにあたって、授業の数日前に児童にアンケートを取っている。

①東林小学校には「松の子・みどり級」があります。松の子・みどり級でどんなことをしているか、なんでそういう学級があるのか、知っていますか。松の子・みどり級について知っていることを書いてください。
②松の子・みどり級について聞きたいことを自由に書いてください。

一つ目の質問は、松み級のことをどのくらい知っているのかを把握するためである。実施初期の頃は「知りません・分かりません」という回答も多くみられたが、この数年は前年度の出前授業で聞いたことを書いている児童もみられる。

【一つ目の質問に対する回答】

（平成２５年度６年生）

・障害のある人が通っている。
・少ない人数で勉強している。
・障害の種類でクラスが分かれている。
・プレイルームがある。
・松みの由来は校歌から。　　など

二つ目の質問は、児童の聞きたいことや知りたいことを元に授業を作っていこうと考えたからである。毎年出る質問もあれば、高学年になると毎年記憶が積み重なって、より詳しい質問をする児童もいる。

【二つ目の質問に対する回答】

（平成２５年度３年生）

・何人いますか。
・なんで松み級ができたんですか。
・どんな勉強をしているんですか。
・特別な授業はありますか。　　など

（平成２４年度６年生）

・松の子とみどりは何が違うんですか。
・障害はよくなるのですか。
・介助員さんの名前を教えてください。
・先生が大変なことは何ですか。　など

二つ目の質問の回答は多岐にわたっていて、一人で複数聞く児童もいる。そのため回答の総数がクラスの児童数を上回ることもある。それだけ松み級のことが気になっていながらも、改めて聞く機会がなかったということであり、ここで質問が挙がることに出前授業を続けていく意義があると感じている。

３．継続による成果

取り組みを始めて７年経過し、昨年度以降の６年生は全６回の「出前授業」を受けたことになる。前述のアンケート項目の一つ目、「松の子・みどり級について知っていることを書いてください」という質問に対し、導入初年度（平成１９年度）の６年生は１４３名中４２名（２９％）が「知りません・分かりません」と回答していた。その後は学年によってばらつきはあるものの、平成２４年度の６年生は１３６名中４名（３％）、平成２５年度の６年生は１２１名中２３名（１９％）、平成２３年度の６年生はデータが１クラス分しか残っていないものの３４名中５名（１５％）と、ここ３年間では「知りません・分かりません」と回答した割合が１１％と減少している。このなかには「忘れました」と回答した児童も含んでいる。一度聞いただけでは忘れてしまうこともあり、６年間続けて聞くことで少しずつ記憶を積み重ねていけるのではないかと思う。

どの学年も「出前授業」の実施は各学年の行事等に合わせている。

【出前授業実施時期】（平成２４年度）

１年:12 月上旬…交流体育前
２年:11 月中旬…学校へ行こう週間内
３年:10 月中旬…交流給食前
４年:６月中旬…校外学習前
５年:９月下旬…若あゆ前
６年:９月上旬…修学旅行前

校外学習の実施と合わせることによって、「出前授業」で聞いたこと、知ったことをどのクラスの児童も（交流児童がいないクラスもあるため）実際の場面で活用する機会ができる。

昨年度私が受け持っていた５年生の女児は、若あゆの宿泊学習の参加にあたって、保護者がとても心配していた。みんなと一緒に寝ることができるのか、おふろでは自分で体を洗うことができるのか、（本人の行動がゆっくりなので）みんなと同じペースで過ごせるかなど、事前の面談で様々な不安が挙がっていた。そこで、「出前授業」のなかで女児が苦手なこと、困るであろうこと、けれど自分でがんばっていることを同じクラスの友だちに伝えたところ、たくさんの優しい配慮があったようだった。若あゆの一泊二日、女児の付き添いで行ったにもかかわらず、日中の活動以外の時間、特に夕方の自由時間などはほとんど女児の姿を見ていない。それだけクラスの友だちの受け入れ姿勢ができていたことによって、本人も自信を持って過ごすことができたのではないかと思う。

〈若あゆでの活動〉

１１月に学校へ行こう週間があり、本校ではこの期間内に「おすすめ授業」を設定していて、２年生はこの「出前授業」を充てている。多くの保護者や地域の方が参観され、松み級のことを知っていただく良い機会である。

【保護者の感想】（平成２５年度）

・私自身も松みさんのことはよく知らなかったので、お話を聞くことができてよかったです。具体的に、こんな時はこういうふうに話しかけるとか、こう思っているんだとか、わかりやすかったです。
・いままで特に松みさんの説明がなかったので、子どもたちもそれぞれ理解したのではないかと思います。
・同じクラスのＳさんと関わることで、うちの子も学べることがあるようです。

４．「出前授業」のこれから

私が「出前授業」に初めて携わったのは平成２３年度、開始から５年目のことだった。最初に行ったことは活動の写真の入れ替えである。初年度に作ったスライドのままになっている箇所もあったため、毎年全てを入れ替えるわけではないが、児童の入れ替わりに合わせ、今現在松み級に在籍している児童の様子を用いた。また、学年ごとのスライドに応じその学年に在籍している児童の写真を多めに入れて、より身近に感じてもらえる工夫も行った。学年ごとのスライドには分かれているが、その中身は毎年見直す必要がある。

写真に限らず、児童が入れ替わるということは伝える必要のある障害も変わっていくということである。立ち上げ当時にはダウン症の児童が在籍していたため、その説明も含まれていたが、現在はダウン症の児童は在籍していない。違った障害特性を取り入れたほうが良い部分もある。学年によって内容の変化をつけているが、同じ内容が重なっているところもあり、繰り返しによる定着が図れている反面、新鮮味に欠けている。内容を再度検討する時期かもしれない。

「出前授業」の立ち上げに関わった職員は既に松み級を離れている。立ち上げに関わった職員と共に松み級を担当した職員も残り少なくなってきた。立ち上げ当初の思いを大切にしながら、実態に合わせて形を変え、「出前授業」の取り組みが継続してくことを願っている。

〈出前授業の様子〉

Ⅲ　「逆出前授業」の実施

１．きっかけとねらい

昨年度、５年次研修を受講していた。５年次研修のテーマは「学年の活性化に向けて」だったのだが、特別支援学級の担任であったため、学年という所属が無かった。「学年」という部分を「特別支援学級」と置き換えると、「特別支援学級の活性化に向けて」となり、児童及び職員の特別支援学級児童に対する理解が広がっていく状態を活性化ととらえることができる。児童に対する部分は既存の「出前授業」を見直すことで取り組めている。職員に対する部分を考えたことから「逆出前授業」の取り組みが始まった。特別支援学級担任が通常の学級に出向いて授業をすることを「出前授業」と称している。一方、通常の学級担任が特別支援学級に出向いて授業をするわけだから「逆出前授業」となる。

特別支援学級児童への対応や発問・指示の出し方は独特な部分もあるが、通常の学級においても有益な手段となりうる。それらの支援方法を知ってもらおうと、初年度は私と比較的経験年数の近い職員に声をかけ、空き時間等を利用し授業を行ってもらった。教科についてはそれぞれの職員の特技を生かせるものをお願いし、内容や進め方については事前に打ち合わせをした。

２．昨年度の実践

①図工：ストローを用いた工作
（同期の６年担任）
②体育：ボール遊び
（バスケットボールが得意な６年担任）
③生活：外国の文化
（海外旅行経験が豊富な５年担任）
④音楽：バイオリンを聴こう
（バイオリンを弾ける１年担任）
⑤理科：電気を通すもの・通さないもの
（たくさんの道具を持っている理科専科）

①図工

初めての「逆出前授業」は図工で、ストローを用いた工作を行った。うさぎが鉄棒のようにクルクル回る、完成したあとにも楽しめる作品である。

〈「逆出前授業」・図工〉

授業者との事前の打ち合わせで、二点確認した。一つ目は、製作の手順を板書することである。特別支援学級の児童は視覚優位なことが多く、耳から聞く情報よりも目で見た情報のほうが理解しやすい。二つ目は、その板書の際に手順を一つ一つ区切って、①…②…③…のように表すことである。児童によって製作の進度に差が出ることから、今どの段階を進めているのか児童自身が分かるとともに、終わりの見通しを持つことができる。

これらの説明方法は、特別支援学級に限らず通常の学級の図工や家庭科などでも有効である。授業後、授業者に感想を聞くと「よりわかりやすく伝えるためには、指示の精選をして、いかに短い言葉で伝えるかが大切だと感じた」と話していた。

②体育

初回の「逆出前授業」を行ったことを校内で紹介したところ、「私もやりたい」と名乗り出てくださった６年生担任に体育をお願いした。バスケットボールが得意なことを知っていたので、ボール運動の授業を設定した。

最初は一人ひとり風船を持ち、高く投げたり投げたあとに回ったり、個の動きを行った。それからボールに持ち替え、二人で投げ合う活動や集団でのゲームを取り入れていた。

授業者のねらいとしては、風船がボールに、一人の活動が二人・集団にと、それぞれの動きが次の活動で生きるよう、やることの流れがつながるようにしたとのことである。段階をおってレベルが上がっていくので、児童も無理なく活動することができた。

〈「逆出前授業」・体育〉

③生活

前述の若あゆに参加した女児の交流級へ付き添っていくと、提出物を出す場所がカゴごとに分かれていたり、常時活動の流れが掲示されていたり、場の構造化がなされていた。むしろ逆に私たちが勉強させてもらえるのではないかと授業をお願いした。海外旅行経験が豊富であることから、外国の文化について生活の授業を設定した。

〈「逆出前授業」・生活〉

授業の導入において、さまざまな国の写真を見せながらクイズが出題された。写真を見せるだけでは興味の持続が難しいところ、自分で考えて札を上げるという動きが入ることによって、集中が途切れずに参加することが

できた。中盤はその写真を国ごとに分類するなど活動につながりがあり、授業の最後には、各国の洋服や帽子を実際に児童が着る時間もあった。「自分の生活と離れたことでも身近に感じてほしかった。持ってきた写真や服などに興味を持ってもらえてよかった」と授業後に感想を話していた。

④音楽

これまでの３回は高学年の担任であり、専科による空き時間を利用していたが、さらに授業者の幅を広げるべく、１年生の担任に児童の下校後の時間を利用してお願いした。

松み級の音楽の時間に「山の音楽家」を歌っていた。歌詞のなかにいろいろな楽器が出てくるが、その一つにバイオリンが出てくる。歌詞のなかでは「キュキュキュッキュッキュ」と歌われているが、実際にどんな音がするのか、授業者がバイオリンを弾けることから演奏をしてもらった。

〈「逆出前授業」・音楽〉

体験を通して学ぶことの多い特別支援学級児童である。実際の音色を聴きながら、自分の思い描いていた音と比べ、楽しんで鑑賞していた。また、授業の最後には一人ひとりバイオリンを持たせてもらい、少し音を鳴らす貴重な経験もできた。

⑤理科

「逆出前授業」の取り組みを一過性のもので終わらせないためには、自分と経験年数の近い職員だけでなく、ベテランの職員にもお願いをする必要性を感じていた。以前から「逆出前授業」に興味を示していた理科専科の職員に、担当学年の授業が終わった３月にお願いすることができた。

〈「逆出前授業」・理科〉

「電気を通すもの・通さないもの」という課題で一時間の授業を設定し、実験を行った。対象のものが電気を通す場合、豆電球が光る装置を使うことが多いが、今回の授業では電気を通す場合、音が鳴るという仕掛けがされていた。電気を通す・通さないという概念は理解しにくい児童も多いが、音によって注目させる手段はとても有効であった。

３．「逆出前授業」から得たもの

通常の学級の職員に特別支援学級の様子や手立てを知ってもらおうと始めた「逆出前授業」であったが、特別支援学級の担任にとっても新たな気づきがあった。

例えば体育の授業では、児童の実態が異なることから、普段の授業では個で取り組む活動を多く取り入れ、集団で取り組む活動が少なくなっていた。けれど「逆出前授業」では、みんなで一つのことを成し遂げたいという授業者の思いから、チームワークを必要とする活動が取り入れられていた。我々松み級担任は、難しいのではないかと心配しながら様子を見ていたが、児童は一生懸命取り組み、たくさん成功させていた。松み級担任の発想だけでは達成できない成果である。

この「逆出前授業」によって、特別支援学級児童は、各先生の得意分野の授業を受けるこ

とができ、授業者の通常の学級担任は、支援を必要とする児童への手立てを学ぶことができ、特別支援学級担任は、日頃気づかない新たな発見があり、三者とも得るものが大きい取り組みであった。

４．「逆出前授業」のこれから

今年度は、一学期に松み級の授業公開が行われた際の協議会の場で、昨年度の取り組みを紹介した。何名かの先生がやってみたいと松み級担任に声をかけたそうである。今年度、私は松み級を離れ６年生担任をしているため、少し離れたところから携わっているが、鉄棒の得意な５年生担任や松み級に関心のある１年生担任が「逆出前授業」を行う予定である。どの職員も日々忙しくすごしているなかで、空き時間等を利用することはなかなか難しいが、年間数回でも取り組みが続いていくと学校内への特別支援学級理解が広がっていくのではないかと考えている。

また実施にあたって、これまでは松み級担任から依頼する形で声をかけることが多かったが、通常の学級担任のほうからも「やってみたい」と声があがるような体制づくりを目指している。教育計画の「出前授業」の下の欄に「逆出前授業」の記載を残した。

Ⅳ　おわりに

７年前に始まった「出前授業」の取り組みが定着した理由の一端に、当時の松み級担任が教育実践研究論文に書き記したことが挙げられる。それまで無かった新しい実践の成果と課題を残したことによって、担当が入れ替わった現在まで続いているのだと思う。「逆出前授業」が今後定着していくかは、まだ分からない。現任校に私が勤務する期間も残り長くはなく携われる時間も限られてきた。三者に得るものの大きかった「逆出前授業」である。続けていくことに価値があると思い、それが今回この論文を作成した動機でもある。

「出前授業」の児童からの質問のなかに、はっとさせられるものがあった。

> ・Ａさんは障害がないのに、なんで松み級に通っているんですか。

Ａさんは前年度まで通常の学級に在籍し、途中から松み級に籍を移した児童である。特別支援学級の入級にあたっては基準があることは承知しているが、何をもって障害の有無と判断するかは難しいところであり、通常の学級児童へもなかなか伝えにくい。松み級に在籍しているなかには障害があると感じられない児童もいる。先ほどの質問にはこのように答えた。

> ・Ａさんにとって、一番学習しやすい場所を考えたとき、それが松み級だったんだよ。

「出前授業」「逆出前授業」の実践が、どの子にとっても学びやすく、過ごしやすい環境づくりを考えるうえでのきっかけとなることを願っている。

Ⅴ　引用・参考文献

・東林小学校教諭　上野隆
「学校全体に特別支援学級や障害理解を深める取り組み～松の子･みどり級の「出前授業」を中心に～」
（平成２０年度教育研究実践論文）
・東京都日野市公立小中学校全教師・教育委員会 with 小貫悟
「通常学級での特別支援教育のスタンダード」　東京書籍